

インドの人々と占星術

福 永 正 明

1. はじめに

“現代インドの人々にとって、自分の生年月日を正確に記憶していることはめずらしいが、子供から老人までだれもがスラスラと口にすることができるのは、自分の生まれた時刻の星の状態である”といわれている。これは、星や占星術に対するインドの人たちの関心の高さを示す言葉であると考えられよう。事実、「古い伝統と高い文盲率を持つインドが現在では占星術のいちばんさかんなところといえよう」〔中山, 1979; p. 179〕との指摘があるほどに、インドでは占星術が日常生活のなかで重要な役割を担っている。

占星術についてインドでは古代以来数多くの記録・文献があり、それらに関してはインド古典文献学の分野から研究がなされてきた。しかし、占星術と今日のインド社会や人々との関係といった観点から研究がおこなわれる例は少なく、村落調査報告〔Lewis, 1958〕, 〔Srinivas, 1976〕, エッセイ〔モハンティ, 1975〕などの一部として記載があるだけで詳細には明らかにされていない。

そこで本稿は、現代インド社会の研究を社会人類学的方法によつてすすめるなかで明らかとなつた占星術と人々とのつながりについて報告するものである。

2. 求婚広告にみる占星術

筆者がインドの占星術について関心を持つたのは、新聞に掲載される求婚広告（結婚相手を求める広告）に関する調査・研究をすすめる時であつた。これは、南インドの英語新聞に掲載された求婚広告を研究した辛島昇・辛島貴子氏の論文〔辛島昇・貴子, 1973〕に刺激されて取り組み、すでに〔福永, 1980〕として発表した研究である。その内容は、北インドで発行される英語とヒンディー語の日刊新聞2紙の日曜版に掲載された求婚広告を1977年に400例収集し、宗教・ヴァルナ・性別・年齢・収入・ジャーティ規制などについて分析したものである（英語紙…… The Times of India, 以下 T. I. と略す、ヒンディー語紙…… Hindi Hindustan, 以下 H. H. と略す）。

求婚広告の分析をするなかで、広告によつては、“Mangal”という記載があるものが多く、これが占星術において“火星”を示す語であることが判明し、求婚広告に対する関心とは別に占星術についても興味を持ちはじめたのである。

400例（T. I., H. H. 各200例）の広告で、広告者（配偶者を求める本人）の実数は429人（T. I. 210・H. H. 219）を数え、その性別は男216人（T. I. 93・H. H. 123）、女213人（T. I. 117・H. H. 96）である。これら429人のうち、占星術について何らかの記載があるものは73人（男21・女52, T. I. 42・H. H. 31）もあり、全体の17%が占星術に拘泥していることが明らかとなつた（ここでいう占星術とは、広告者の“誕生星”のことであり、誕生星は生まれた日・時によつて定められ、27ある星のそれぞれが良い悪いなどの意味をもっている）。

73人の広告は、自分の誕生星が火星であることを記すことにより、火星を誕生星とする相手を求めていることを示すものと、相手の誕生星が火星であることを望むと記すことにより、自分が火星であることを示すものと、2つのタイプに分けることができる。つまり、どちらのタイプも、結婚する2人が火星を誕生星とすることが求められている、といえるであろう。また、73人の広告のうち80%以上が“火星”について言及していることから、自分の誕生星を火星とするものが占星術について何らかの問題を抱えていると考えられる。

では、なぜ“火星”だけが、このように人々にとって重要な意味をもつのであろうか。それは、火星が相手に害を与えるという意味をもち、“火星を誕生星とする人間と、そうでない人との結婚は不幸に終わる”と広く信じられ、この星を誕生星とするもの場合は、結婚相手を見出すのに大変な苦勞をすることになるからである。しかし、救済方法は用意されており、火星を誕生星とするもの同志が結婚すれば、お互いのマイナスがぶつかつてプラスになるとされる。求婚広告に自分の誕生星が火星であることを記しているものが多くみられるのは、この“救済”のために同じ誕生星の相手をみつけないからであろう。プラスとなる結婚を望むがために、多くの人々が求婚広告を新聞に掲載し、結婚相手を求めているのである。すると、求婚広告に現われた占星術に関する内容からだけでも、人々にとつていかに占星術が重要な役割を日常生活においてはたしているかが明らかとなるのである。

3. インドの占星術

インド古来の土着の占いと並んで、個人の生誕時における惑星の位置（誕生星）

で人生のコースを決めるという明らかにヘレニズム系と思われる占星術が混入しているのがインドの占星術であるが、その特徴は、西洋の12宮をインド伝来の28宿にとつてかえたことにある。

子供が生まれると、役場に届けるのと同じように、代々かかりつけの占星術師のところに行つて、子供のホロスコープを作つてもらふ。そして、その後も結婚・耕作、その他なにか事件や問題があると、占星術師のところへ相談に行き、占星術師は生まれた時と現在のホロスコープを照らし合わせたうえで、災厄を免れる方法を教えるのである。占星術師たちのカーストはバラモンが大部分で、たいてい父子相互の世襲のものであり、何代もつづいた客をもっている。村の占星術師の生活についてはモハンティが詳しく記している [モハンティ, 1975; p. 72-79]。

占星術師に相談する最大の問題は、先の求婚広告の例でも明らかのように結婚である。「もし占星術師が“だめだ”といつたら、多くの場合結婚はまともらない」 [モハンティ, 1975; p. 144] とされるほど、結婚においては占星術が重要な役割を担っているのである。

また、“暦”が市販され、そのなかでは、毎年、毎月、毎日、毎時、毎分、毎秒が惑星の位置関係から計算されており、それが人の生活にどのような影響を及ぼすかが占われている。「暦はオーソドックスなヒンドウーにとつて不可欠なものである」 [Srinivas, 1976; p. 330] とされ、村の占星術たちはその占いをこれらの“暦”に求め、都市では人々が日常生活の参考にするのである。

4. ま と め

これまで、現代インドの人々と占星術について、筆者の求婚広告の研究を中心に述べてきた。そこでは、人々と占星術が非常に強いむすびつきを保持していることが明らかとなり、結婚と占星術の関係がきわめて重要であることも確認されたのである。今後、さらに、都市や村落における占星術と人々のつながり、そして、占星術について調べたいと考えている。

〈文 献〉

- 福永正明, 1980, 「新聞の求婚広告にみる北インド社会」『季刊 人類学』11 卷 1 号。
 辛島昇・辛島貴子, 1973, 「インドの新聞にみる求婚広告」『季刊 人類学』4 卷 1 号。
 Lewis, O., 1958, *Village Life in Northern India*, University of Illinois Press.
 モハンティ, 1975, 『わがふるさとのインド』小西正捷訳, 平凡社。
 中山茂, 1979, 『占星術』紀伊国屋書店。
 Srinivas, M. N., 1976, *The Remembered Village*, University of California Press.

(東海大学大学院修了)